

守りたい

“多久がある”

伝承したい
300年の誇り

江戸時代の多久では、
武士、町人、農民を問わず
領民の心はひどく荒んで
いたと言われています。
そこで領民たちの心を改
めるためには「教育」が必
要だと考えた多久四代領
主多久茂文公（以下茂文公）
は、身分を問わず学ぶことが
できる学問所（後の東原庵舎）
を創設しました。

さらに、学問の象徴として孔
子を祀る多久聖廟を創立。多久
聖廟は全国の孔子廟の中で最も
壮麗といわれていますが、
そこには茂文公の隠され
た意図が込められてい
ました。なぜ聖廟があ
るのか、なぜ壮麗なの
か、孔子様とは……
と、訪れる人にあえ
て疑問を抱かせる

釈菜

Sekisai

4月18日(月)開催
孔子の里 多久聖廟

▲ 式典後、聖廟境内では、地元の児童生徒に
よる優美な釈菜の舞、参列生徒の唱歌、孔子
の里腰鼓も披露されます

が がく ぶ 孔子の里芸能保存会雅楽部

釈菜で雅楽を奏でる「孔子の里芸能保存会雅楽部」。総勢21人
の伶人が演奏を行います。4月から楽長を務める上瀧さんに
「釈菜」に込める思いを聞きました。

「孔子の里芸能保存会雅楽部の特徴は、“口伝”によって伝承されている
ことです。練習は楽譜を読むのではなく、唱歌から始まります。口で謡い、口で伝
える。そうして先輩方から歴史を紡いでいます。釈菜の進行に重要な役割を担う
一員として、次の世代へ伝えていくことを使命と感じ、練習に励みたいです。」

／ 雅楽部次期楽長／
人権・同和対策課長
生涯学習課参事
わたき きくお
上瀧 幾久生さん

滞りなく式が進むような
雅楽演奏に努めます